

世田谷区玉川総合支所 アートワーク

アート・ディレクション 特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センター

2021年はじめに、新装なった玉川総合支所のコミュニティ広場に2人のアーティストによるアートワークが設置されました。それは等々力溪谷に代表される地域の貴重なアイデンティティを発信し、ユーザーフレンドリーな庁舎空間を提供しています。

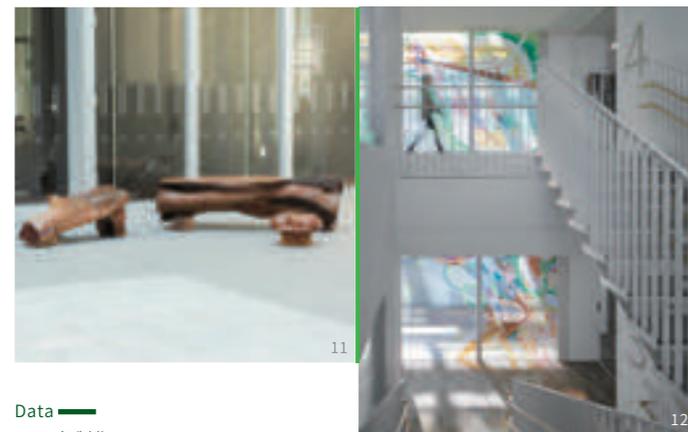
コンセプト

〈インナーパーク：中庭／心の庭〉を創造する

1. 地域の宝である等々力溪谷をメイン・モチーフとして表現
2. 新庁舎の平面軸（広場）と垂直軸を結びつけて憩いの環境を創出
3. 旧庁舎にある、石材、樹木を再生し新たに活用
4. 区民が休憩できるベンチなど機能性をもつ作品
5. ガラス面を活用し、新たなアート性を提示できる作品
6. 住民とのワークショップを実施、住民からのインプットを重視

プロセス

アートワークの設置は設計段階から入り、世田谷区、設計者、施工者、アーティストとの十分な検討を通じて実現化していきました。各アートワークについて数人のアーティストをアート&ソサイエティ研究センターがリストアップして、世田谷美術館、世田谷区、設計者からなる選定委員会を通じて、アーティストからのプロポーザルの提出とヒヤリングを通じて選出されました。その結果、選ばれた木村桃子氏と白井ゆみ枝氏が地元小学生とのワークショップを実施（2019年11月23日）、地域を日常的に感じる子どもたちのイメージが、アーティストのイメージと響き合っており、作品として昇華されました。これら2作品を通じて、新庁舎の真ん中の光あふれる大きな吹き抜け空間に、地域の宝である等々力溪谷や旧庁舎の桜の木の記憶が凝縮され、市民にひらかれた憩いの場、市民が集うコミュニティ広場に新たな生命感を吹き込んでいます。



Data
2020年制作

木村桃子
「水と木のリビング」
桜材
(旧庁舎にあった桜の木によるベンチ)

白井ゆみ枝
「とどろきにうつりこむ」
特殊フィルム
(原画をプリント、ガラス面貼付)

ディレクション：特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センター
設計・監理：(株)佐藤総合計画
施工：東光・神興・大洋建設共同企業体
所在地：〒158-8503 東京都世田谷区等々力3-4-1

制作・発行：特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センター
〒101-0021 東京都千代田区外神田6-11-14 3331 Arts Chiyoda-309
URL: <http://www.art-society.com>
email: info@art-society.com



世田谷区
玉川総合支所
アートワーク

「水と木のリビング」
木村桃子

この街の風景を切り取ってみると豊かな自然に出会うことができました。

旧庁舎で区民に親しまれていた桜の幹の大きなうねりからは雄大なパワーを感じ、等々力溪谷で拾った木々のかたちを子供達と手にとると、その小さな世界に色と形が踊り出すようです。

大きい世界でも小さい世界でも、ひとと木もカマキリも木も川も皆等しく同じ場所で生きていました。

皆が行き交う広場もまた、生活の場となります。この場所がだれにとっても、もう一つの居間のような存在であればと願い、座れる彫刻としてのベンチを制作しました。

大木のエネルギーな生命感、水や風や光などから感じる爽やかな流動性、小動物たちとの出会い。溪谷のそばに溢れる自然に思いを巡らせて座ってもらえたら嬉しいです。

1~3 ワークショップの様子



Profile

丸太、枝、リサイクルショップの木製品など木材を素材の中心として使用し、住居などの生活文化を通して人間と木が歴史を紡いできたことに興味を持ち立体作品を制作している。最近ではコロナ禍での台所を中心とした制作と生活を掲げた展覧会「まあ、新しい生活様式 都市鉱山の調理法」の企画参加も行う。2019年武蔵野美術大学大学院彫刻コース修了。現在は同大学、芸術文化学科研究室助教。2019年個展「unmasked」(galerie H)、CAF賞2019入選。
Webサイト
<https://momokokimura0306.wixsite.com/momokokimura>

ごあいさつ

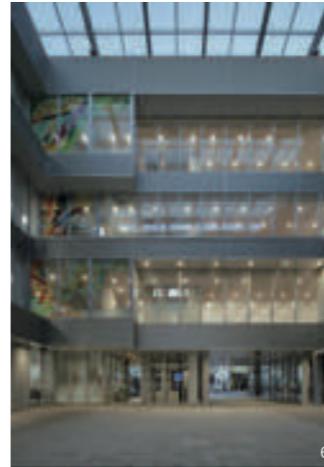
世田谷区玉川総合支所長 工藤 誠

新しい玉川総合支所・区民会館は「災害時対応機能の強化」「ユニバーサルデザインの推進」「環境共生の推進」「まちの賑わいの創出」の4つを基本方針として改築事業を進めてきましたが、この中で街の賑わい創出の核として、ホールと一体化したコミュニティ広場を設置しました。この空間に彩りを与えてくれているのが今回のアートワークです。

アートワークでは近隣の子どもたちとのワークショップを経て近くを流れる等々力溪谷をイメージしたフィルムアートとベンチを作成いたしました。

コロナ禍の中、生活様式も大きく変わりつつありますが、アートの持つ力は変わらないと思います。ここを訪れる方が、ベンチに座ったり、アートフィルムを目にして心が豊かになるような空間となれば幸いです。

今後、玉川総合支所と区民会館が、これまでも増して地域の皆様に親しまれ、便利にご利用いただける施設となるよう、職員一丸となって取り組んでまいります。



パブリックアートによる自然と継承の表現

設計 佐藤総合計画 香月卓也

2015年の設計プロポーザルから5年半。世田谷区玉川総合支所の改築が完成した。区内の地域毎に設置される総合支所は、生活に密接にかかわる施設として多目的ホールを中心とした「区民活動」と「行政サービス」の複合機能が求められた。

等々力駅に近く、住宅や商店が集積した敷地内に、旧施設の約2倍規模で建替ることとなった。設計のアイデアは、15m四方の半外部空間（コミュニティ広場）を内包し、多目的ホールと空間的に連続させたことだ。厳しい敷地条件だが、明るくわかりやすい豊かな空間構成としている。

設計当初から、建築と一体となるパブリックアートの導入を構想した。それらを街の人々が行き交い、利用者が触れ合うコミュニティ広場に配置した。玉川地区にふさわしい施設と融合したアートワークが、空間にアクセントをもたらし、地域住民から永く親しまれる場を創ることができると考えた。

玉川総合支所の近くに、都心のオアシス「等々力溪谷」がある。特徴的な地形は閑静な都心の中であって、街をえぐり取るように生々しい自然を露出させている。地域のアイデンティティである等々力溪谷をモチーフにアーティストが地元小学生参加のワークショップを通じて作品にした。

コミュニティ広場に面するガラスフィルムのアートは、白井ゆみ枝氏の「とどろきにうつりこむ」。溪谷の深さは10mあるが、作品も同様に吹き抜けに面し高さ10mに及ぶ。溪谷下から仰ぐ光景を表現し、生命力を感じるものだ。半透明のフィルムは、スタンドガラスのように光や色彩が躍動し、施設空間と一体化している。

旧庁舎施設の石材を再利用したコミュニティ広場の石畳に設置した作品は、木村桃子氏のベンチアート「水と木のリビング」。玉川地区の半世紀を旧庁舎とともに見守ってきた桜木は、アートワークとして新たな命が吹き込まれた。ねじれた幹の動きはそのままに、大きく割れた木肌の亀裂に透明樹脂を流し込むことで、等々力溪谷の清流を切り取った表現となっている。

建築とアートがコンセプトで結びついた事例はまだまだ少ない。公共施設にはこうした地域の生活と密接にかかわりあうパブリックアートがふさわしいと思う。建築もアートも「発信する者、受ける者、共有する者」それぞれが日常の中で寄り添う場を形成してほしいと切望する。公共の場には、アートが必要だ。

「とどろきにうつりこむ」
白井ゆみ枝

街のとなりに、むき出しの自然がいる。初めて訪れた等々力溪谷に降り立つと、大きな生き物のお腹の中に迷いこんでうでした。骨組みは立派な木々。川は脈打つ鼓動。歴史が積み重なった川底と、こもれ陽がふりそそぐみなも。

ワークショップでは地域の子ども達と一緒に、みなもにうつりこむ様なものを描き、それを元に制作を進めました。子ども達が描いた奔放な線と色を思い出しながら、画面の中に鮮やかな色彩の帯を泳がせてみました。それに沿ったりせめぎあいながら出来上がった一つの大きな流れに、ここで暮らすこども達の今と、私が感じた等々力溪谷がうつりこんでいきました。その痕跡が見る方の心にも面白い反応を起こしてくれれば、きっとこの広場にとどろく命の響きが流れ続けていく。そんな願いと共にこの作品と向き合いました。

Profile

空間、事象との出会いによって沸き起こる心の変化、身体のごめきを、絵画表現を起点に大型インスタレーションとして展開。近年では街歩きマップ制作のワークショップや演劇への舞台美術参加、店舗への壁画制作など、日常に溶け込むアートの活動も実践。2000年女子美術大学デザイン学科卒業。2017年大規模個展「上田全気候展」(上田市立美術館)、2018年グループ展VOCA展2018現代美術の展望〜新しい平面の作家たち〜参加(上野の森美術館)。

公式サイト
SHIRAI YUMIE WORKS:shiraiyumie.com



8・9 ワークショップの様子
10 ワークショップに先立ち、参加者たちと交わした交換日記

